

令和2年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業  
(発達障害の可能性のある児童生徒等に対する教科指導法研究事業)  
成果報告書 (I)

実施機関名 (日野市教育委員会)

1. 問題意識・提案背景

東京都日野市教育委員会(以下、「本市」という。)では、平成30年度、文部科学省の研究事業を委託し、「教科つまずき解消プロジェクト」と名付け、市立小中学校全教員から各教科等の学びの過程において考えられる困難さに対する対応事例を収集した。事例は、新学習指導要領解説に基づいて【困難の状態】【配慮の意図】【手立て】に加え、【実際の様子】の項目で集め、ほぼ全員から提出された。提出された事例から「若年教員の経験不足を補う技法論の習得」とその事例の「完成度」が課題になっていた。

そこで令和元年度と令和2年度の2年かけて、課題を明らかにする研修方法の追究をすることで教員が児童生徒一人一人の不適合への対応の指針を得て、教員自身で手立てを考えられるようにしたいと本市は考えた。

◎本市のこれまでの教科教育における配慮の在り方の研究

本市は、明星大学教授小貫悟氏の指導を受けて、学習に困難を示す子供の早期発見・早期支援を実現するために、予防と改善を目的とする『学習の三段構え』(図1)の実践を重ねてきた。『学習の三段構え』では、授業における子供のつまずきに目を向け、まず学級全体に対する支援として「授業の工夫」をする。次に全体の支援では対応できない子供に対して授業内で「個への配慮」を行い、それでもなお困難がある場合に授業外での「個に特化した指導」を行う、授業と連動した支援を展開するための方法である。

○三段構え1:「授業の工夫」

- ・焦点化、視覚化、共有化等の視点をもつ授業改善

教科学習に困難さを示す子供のつまずきを解消するために学級全体に対して行う工夫は、他の子供にとっても良いことが多いという考え方で授業のUD化を進めてきた。文部科学省の委託事業を受け、講師を招聘し、小中の全学校でUDの授業研究を実施した。

「全ての子が分かる・できる」授業作りをテーマにしてきたものである。図1は、この実践に関する理論モデルである。

○三段構え2:「個への配慮」

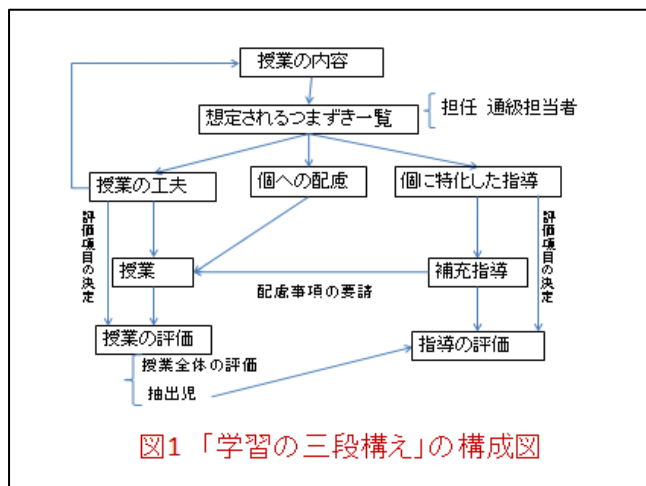
- ・全教員による「教科つまずき解消プロジェクト」

一斉指導だけでは、救えない子供がいる。そうした子供の困難な状態に気づき、手立てを考える教師でありたい。そこで29年度には、文部科学省の委託事業で、明星大学発達支援研究センター研究員の協力を得て、読み書きのつまずきを見つけるためにアセスメントの作成と実施をし、子に特化した指導において具体的に何をすればいいか根拠をもって指導することが大事であることを実感することができた。

しかし、教員にはこの読み書きアセスメントに多くの時間を費やすことも難しい。ならば教員が子供一人一人のつまずきに対し、自分たち自身で手立てを考えることができる方法はないだろうか考えた。

新学習指導要領解説には、【困難の状態】【配慮の意図】【手立て】を各教科で数事例が示されている。

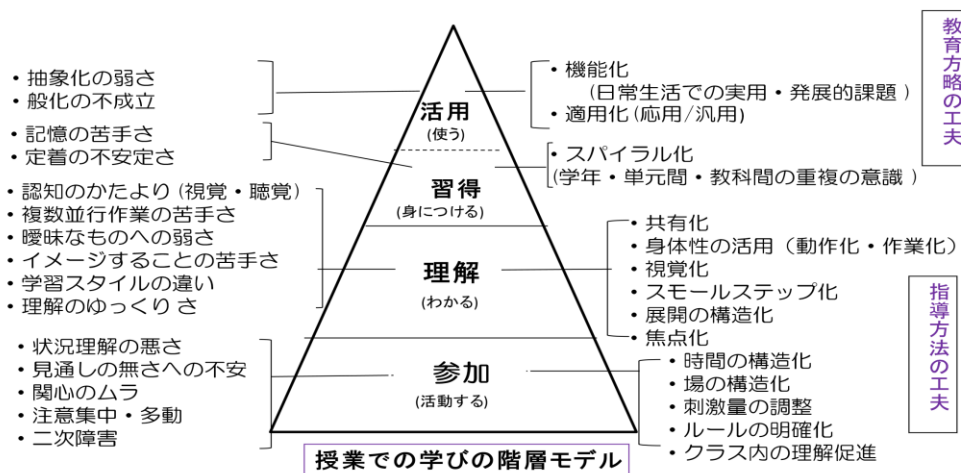
しかし、日々の各教科等の学びには、様々な【困難の状態】が溢れている。【困難の状態】【配慮の意図】【手立て】について教員一人一人が、自身で考える力を養うことは、まさに教師の力量を高める



方法のはずである。小貫氏から、新学習指導要領解説で書かれている【手立て】を分析すると、全て「困難の状態を解消する授業の工夫」・UDの視点（図2）に分類することができる。と学んだ。（表1）は一例である。

表1 新学習指導要領 解説（算数）での配慮の1例とUDの視点(明星大小貫氏)

困難の状態	配慮の意図	手立て	UD視点
「商」「等しい」など、児童が日常使用することが少なく、抽象度の高い言葉の理解が困難な場合	児童が具体的にイメージをもつことができるよう	児童の興味・関心や生活経験に関連の深い題材を取り上げて、既習の言葉や分かる言葉に置き換えるなどの配慮をする	感覚の活用 スパイラル化
文章を読み取り、数量の関係を式を用いて表すことが難しい場合	数量の関係をイメージできるよう	児童の経験に基づいた場面や興味ある題材を取り上げたり、場面に具体物を用いて動作化させたり、解決に必要な情報に注目できるように文章を一部分ごとに示したり、図式化したりすることなどの工夫を行う	感覚の活用 焦点化 視覚化



そこで、30年度には、市内小中学校の全教員から教科で特定の困難を示す子供の対応事例を集め、共有する方法に挑戦することにした。それは、「これまでの教員としての教科教育活動を振り返って、出会った【困難の状態】に対して、いかなる【配慮の意図】をもって、どのような【手立て】を打ったのか。そして、その結果がどのようなものであったか」ということに対して、約650名の全教員にレポート提出をしてもらうことである。この試みは「市内つまずき解消プロジェクト」と名付けられ、この学校内での工夫を集約することで、教科教育におけるつまずきを集めたサンプル集を作るという構想の中で行われた。

### ◎「市内つまずき解消プロジェクト」を通して見えてきた課題

本プロジェクトを進めるにあたり、課題も明らかになった。現在、各校の教員の年齢構成上、若返りが一気に進んでいる。そもそも、「困難の状態」「配慮の意図」「手立て」を考え対応する経験が少ない。

さらに、もう一つの課題が見えてきた。それは1,600以上のつまずきを収集することができたが、その内容の完成度である。これはもちろん、上記の経験不足の教員の増加が一因ではある。しかし、提出した教員がベテランであってもその【手立て】の内容にまだまだ改善があると認められる例も少なくなかった。

### ◎つまずき解消への研修を続ける必要性

さらに、本市では、この【困難の状態】【配慮の意図】【手立て】について教員一人一人が、自身で案出できる力量をもってほしい理由がある。それは、電子オンライン化した本市の個別の教育支援計画である「かしのきシート」がある。この「かしのきシート」に書かれる子供の様子や個別の指導や支援の計画が子供の不適応を救う柱になると期待しているものである。「かしのきシート」は、本市が企業と共同で開発したシステムである。既に市内の3歳から18歳までの子供の7パーセントを超える特別の支援の必要がある子供が登録して利用してい

る。かしのきシート作成システムでは、各年齢における支援者が作成した個別の指導計画や、個別の教育支援計画などを蓄積していくことができ、本人が社会自立を果たしていることが期待される 30 歳までデータベース上に保管される仕組みになっている。

課題は、その内容である。個別の指導計画において書かれる指導目標、指導方法、評価について、書き手の特別支援教育に対する知識・理解の違いにより、その内容に差がある。そこで、個別の指導計画及び個別の教育支援計画を書く個々の教員の知識・理解を高めていく必要がある。

かしのきシートは、前年度は無論、数年前の内容を見ることも可能なシステムである。つまり、一人の子供に対して一度でも高い内容が記載されれば、その後の支援に一定のレベルが確保される可能性が高くなる。

### ◎見えてきた研修方法への研究仮説

以上のような課題と現状を踏まえ、本市の全教員が適切な〈困難の状態⇒配慮の意図⇒手立て〉の枠組みで不適應への対応を行える力を高める、研修方法についての提案をしたいと考えた。この研修の実現に向けて、〈困難の状態⇒配慮の意図⇒手立て〉の枠組みを以下の 3 点を指針に作りたい。(研究仮説)。

- ①：【困難の状態】を確定し【配慮の意図】を決めるときの要領
- ②：〈授業での困難さを生じさせる発達障害のある子の特徴〉から技法を導く要領
- ③：【手立て】を案出する際には各教科等の目標や味方考え方を重視して判断する姿勢の理解

## 2. 目的・目標

「学びの過程における子供の困難さ」に応えることができる教員になるため教員研修の方法論に関する研究

## 3. 主な成果

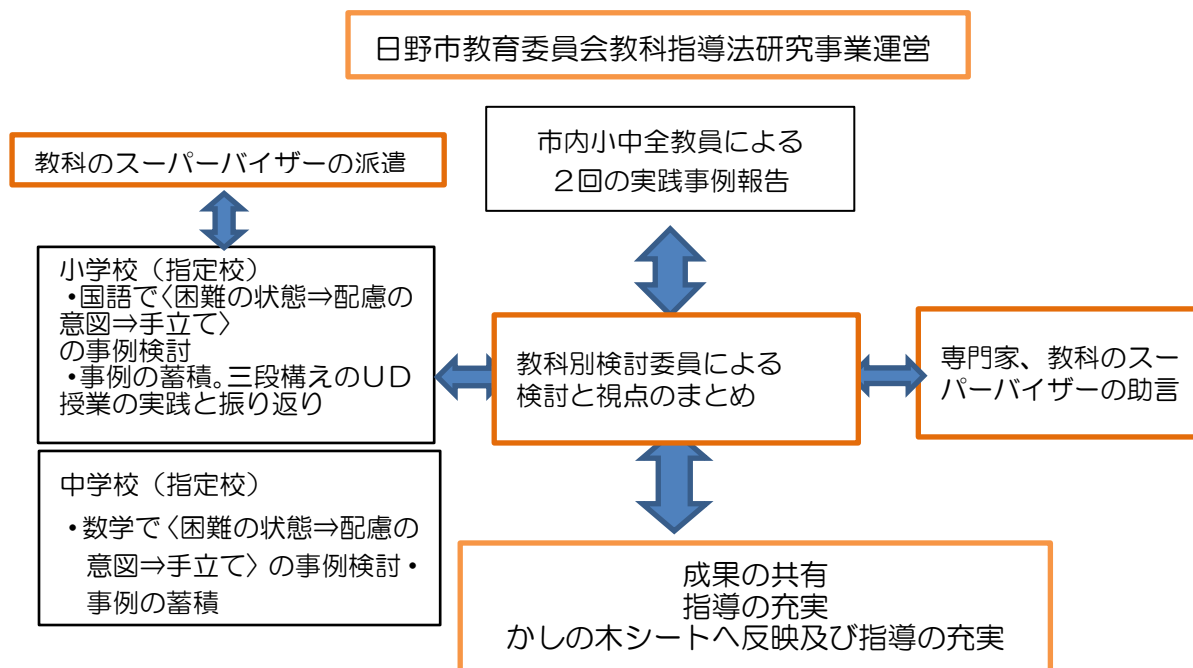
- ① 教員は実践事例をまとめる過程で、学び方の違いに着目し、子供一人一人に適切な「手立て」をとることによって、「つまずき」が解消されることがあることを、実感することができた。そのため、日々の授業で児童生徒の「つまずき」に対する「手立て」を意識することになった。
- ② 編纂（さん）過程で、つまずき解消に対する新たな学びを重ねることができた。
- ③ 市立小中学校全教員から収集された実践事例（1,600 以上）を、検討し、完成したまとめの冊子には、小中学校合わせて 888 事例が掲載された。また、事例集には、方法論として仮設した①【困難の状態】を確定し【配慮の意図】を決めるときの要領、〈授業での困難さを生じさせる発達障害のある子の特徴〉から技法を導く要領を、教科ごとに「教科のつまずき解消における考察」として文章化し示せた。

- ④ 事例集は、全教員に配布され、共有し、日々の指導や個別の指導計画作成に活（い）かされた。また本市の校務支援システムのリンク集に掲載される。
- ⑤ 指定校については、三段構えの手法、すなわち、「在籍学級での授業の工夫」「在籍学級での個への配慮」「通級による指導でのつまずきに対する個別の指導」により、児童生徒のつまずきの解消につながったことが確かめられた。
- ⑥ 本事業は、結果的に授業の質の向上や児童理解が深まった。

#### 4. 取組内容

- ① 教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒に対する指導方法及び指導の方向性の在り方の研究
  - (1) 対象とした学校種、学年  
市内公立小中学校全教員の取組である。学年は全学年対象である。  
指定校は小学校1校、中学校1校とする。指定校においては、モデル的に研究を先行した。
  - (2) 教科名  
指定校の小学校は国語、中学校は数学を中心に。指定校以外は全教科
  - (3) 実施方法  
本研究を「つまずき解消プロジェクト」と名づけ、市内公立小中学校全教員の取組にした。また小学校指定校は、「国語」で三段構えの実践授業研究を実施し、三段構え①「授業の工夫」②「個別の配慮」③「個に特化した指導」の全てを実施し、つまずき解消の先行研究とする。  
中学校指定校は、「数学」で「困難の状況」の理解と「配慮の意図」についての先行研究とする。  
また、市内の教科研究の積み上げのある教員を募り、教科別検討委員会を開き、2年間かけ収集した事例の加除検討をする。  
その後、広く活躍の教科教育スーパーバイザーの助言を得て、修正し、実践事例集として冊子にまとめ、市内全教員に配布し、教師の理解並びに指導力向上を図り、児童生徒の指導・支援の充実につなげる。  
さらに、〈困難の状態⇒配慮の意図⇒手立て〉のデータは、本市における福祉と教育と連携した切れ目のない支援事業である「かしのきシート」を含む個別の指導計画及び個別の教育支援計画の内容の精度を高め、指導の充実につなげる。

## 実施内容の概念図



### 教科別検討委員

小中学校教育研究会等から選抜された教科研究を重ねた教員。委員は教科教育スーパーバイザーの助言を受け、昨年収集した実践事例を〈困難の状態⇒配慮の意図⇒手立て〉それぞれに視点をもってまとめる役割を担う。

### 教科教育スーパーバイザー

教科研究で定評があり広く活躍している有識者。つまずき解消を視野にした授業研究及び教員のまとめた実践事例に対し、教科や特別支援の視点でアドバイスをする役割を担う。

## (4) 取組の概要

### ◎指定校における取組内容（小学校）

#### ア. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

##### (1) 実態把握の時期

- ・ 1年生の担任からの報告により、読み書きにつまずきがあると予想され、2年生1学期に、学級担任、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーター等で丁寧な観察を行う。

##### (2) 実態把握の方法（実施者・方法）

- ・ 2年生6月に校内の言語障害通級指導学級において、絵画語彙発達検査、グッドイナフ人物画知能検査、平仮名单語聴写テスト等を実施。

- ・ 2年生6月より、言語障害通級指導学級での週2回（1回1時間）の指導開始。
- ・ 2年生11月に市のスクールカウンセラーにより、知能検査を実施。

#### イ. 実施した指導方法（工夫した点）

- (1)教科における学習上のつまずきを把握
- (2)つまずいている背景・原因を探る
- (3)(1)に対し実施した指導方法、工夫した点

##### (i) 在籍学級での授業における全体指導、個への指導について

- ・読み書きが苦手であることを考慮に入れた授業作り。(指導内容の焦点化、視覚教材の使用、ポイントで他の児童との対話や話し合いによる共有化)  
→全員音読の多用。視写しやすい板書等
- ・読み書きの負担を軽減する本児童用のワークシートの作成。
- ・黒板が見やすく、教師の声掛けがしやすい座席。
- ・通級による指導（言語障害）の補充指導を生かし、本児童が授業内で活躍できる場の設定。
- ・事前の読み聞かせによる内容の大体の把握。
- ・説明文は段落毎に短冊にした教材文、物語は場面毎に分けた教材文での学習。
- ・書く負担を減らした内容理解を図るためのワークシート。

##### (ii) 個別指導について（取出し指導、通級による指導との連携など）

###### 【言語障害通級による指導】

- ・平仮名を音、形を聞き見ることによって文字が頭に浮かび、書ける、読める等の力を促進するための指導。→毎回、五十音を速記させ、タイムを計る。
- ・無理なく読んだり書いたりができる課題の設定。→付箋を使ったしりとりや言葉集め。
- ・しりとりや言葉集めで出てきた言葉を使った短文作り。
- ・既習漢字の読み書きの復習。

#### ◎指定校における取組内容（中学校）

##### ア. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

###### (1)実態把握の時期

年度当初から一カ月間ほど当該生徒を観察し、課題行動を記録し学習におけるつまずきを分析することによって本人が有する課題を把握する。

###### (2)実態把握の方法（実施者・方法）

担当学年教員が、小学校教員からのアセスメントにより得られた情報から実態把握異を行う。教科担当教員が、保護者や本人との面接でつまずいている単元や領域を聞き取る。また、小テストやノートなどの成果物を点検し学習状況の把握に努める。その他、行動についても担当学年教員が、行動観察日記に記録し行動における特徴の把握を行う。

## イ. 実施した指導方法（工夫した点）

- ①模範授業を全教員で観て、生徒のつまずきの把握とポイントの共有
- ②授業の工夫のポイントを共有し、実践する

### (i) 在籍学級での授業における全体指導、個への指導について

つまずきには以下のようなことが考えられることを共有

- ・既習内容が未定着である
- ・集中を持続することが難しい
- ・書くことに対する集中が困難である
- ・書き写すことに時間がかかる
- ・問題を正確に写すことができない
- ・教員の説明が理解する事に時間がかかる
- ・数の増減が読み取れない
- ・空間を認知することが苦手
- ・短期記憶が定着しない
- ・手順が分からない
- ・ノートを見ても分からない
- ・自分の言葉でまとめることが不得意
- ・話し合いに参加することが苦手

授業の工夫を共有

① 黒板に書かれていることと、手元のプリントに書いてあることを結びつけるのに時間がかかる。 ⇒聞く時間と、手元のプリントにまとめる時間を分けること。

二つ以上の動作を並行して行うことが困難な生徒に対しては、明確に時間を分けて指導することが必要。

② 連立方程式のような複数の式において、扱う文字の順番が変わっていることに気付かず混乱してしまう。

⇒例えば、 $x$  と  $y$  の順番が変わって出てくる場合は、 $x$  と  $y$  を色分けして指導する必要がある。また、順番が変わっていることを矢印などの記号を使って、視覚化し、把握させる。指導する側としては、生徒が混乱しているという状況に気づきにくい場合があるため、少しずつ確認しながら授業を進めていくことが大切であることを共有した。

③ 座標から一次関数の式を求め、グラフを描く場合、座標の $x$ と $y$ の順番と、式の中の $x$ と $y$ の順番が逆になっていた。傾きの求め方を $y$ の増加量を $x$ の増加量で割る方法だけでなく、方眼用紙のように数直線を書き足します目を数えて求める方法もある等工夫する方法を共有した。

- ・全体として学習内容を見通し、全体像をつかみやすくするために学習する内容や要点を繰り返し示し、生徒自身が学習過程や学習内容を言動で反復させることによ



て本人の学習に対する困難さを解消することにつなげていく。

- ・授業に対する集中力を少しでも維持するために、座席配置を工夫する。
- ・掲示物が目に入らないように教室前方の掲示板にカーテンを張るなど教室環境を整える。また掲示物を貼る際は、前方に貼らないようにし、教材提示は特にコントラストをはっきりさせて認知しやすくする。
- ・見通しを立てやすくするために学習の流れを視覚的に示すなどする。
- ・当初のルール（分からないときは挙手をする、問題を解いている途中であれば、発声するなどのルールを決めておく）と安心して学習に集中できることがある等共有した。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

・本人が学習に対する困難さが強い教科において取り出し指導を実施した。また、通級による指導においては個の特性が学習面でマイナスに働いている点に着目し、改善を図る取組を横断的に実践するために教科指導に当たる教員と連携をとり行った。

困っている学習課題をいきなり指導するのではなく、その生徒が得意な計算を最初に出題し、メインの問題までたどり着くまでの助走学習を行う。

失敗をなるべくさせない学習方法として、問題を解くためのヒント（内容、視覚的、言語的指示）を最大から徐々にヒントを減らしていくことで解けたという達成感を味合わせる指導を行った。小テスト、ノートの完成の度合いまた、行動面の課題の実態把握のデータを定期的に分析し不応の頻度が減少していれば効果があったと確かめることができる。

ヒントが最も少なくなっていれば、知識や問題を解く技能が定着したといえる。いろいろな指示の出し方や教材や学習場面を変更した際、適切な答えを導け、答え方に変化させることも確認できれば様々な場面で活用できると評価できる。

面接や日々の意欲的に変化した学習態度などを通して望ましい学習態度が身に付いたと評価することができる。

## ◎教科つまずき解消における考察（一部抜粋）

# ★小学校国語のつまずき解消における考察

今回のつまずき解消プロジェクトに集まった国語事例のなかで「読み書き」に関係するものが、大変多くありました。「読み書き」のつまずきは、他の全ての教科学習に影響を及ぼします。したがって、国語におけるつまずきを早期に解消することは、非常に重要であると言えます。

一口に「読み書き」のつまずきと言っても、「平仮名の読み書きが定着しない」ことには始まり、「長音や促音、拗音の表記が正しくできない」「漢字の読み書きができない」「本文の内容が正しく理解できない」「要約ができない」等々、多岐に亘ります。それらの原因は必ずしも一つではありませんが、「平仮名の読み書きが定着しない」まま、学年が進んでしまうと、次々と新しいつまずきが起こることは、容易に想像できます。したがって、平仮名の読み書きを自動化（読んだり書いたりすることが瞬時にできる）できるようにすることは、1年生担任に任された大きな使命です。

仮名文字（平仮名・カタカナ）を、表音文字です。音（おん）を表す文字であり、字の形を見て、その音（おん）を思い出すことが読むために必要です。その音が思いだせないために、いつまでたっても拾い読みといった児童がどのクラスにもいるはずです。

しかし、日本語は、表音文字である平仮名・カタカナだけでなく、表意文字である漢字もあります。つまずき解消プロジェクトに集まった事例の中にも、表音文字（平仮名・カタカナ）と表意文字（漢字）の定着を図る事例が多く寄せられていました。私たちは、文字をどのように習得させるかということに、意識が向きがちです。しかし、文字とは、人とのコミュニケーションの大切な道具です。文字で表すよさや面白さを理解し、意欲的に文字を覚えるようにすることが大切なのではないかと考えました。国語でどのように文字や文章と出会わせるかが、後の学習に対する興味や習得と大きく関わりをもつと考えます。

例えば、1年生で多く習う漢字の多くは、ものの形で表し、その物の意味も表している象形文字が多いです。そのことを学ぶか学ばないかで児童の文字に対する意欲が変わることでしょう。

その上で、漢字指導においては、児童の特性に合わせた柔軟な指導も大切だと考えます。「その子なりの筆順で書けばいい」「読むことを目標にする」「PCで打った時に文意に合った漢字を選べればよい」等々、目標を柔軟に設定することが、つまずきの解消につながると思っています。

説明文や物語文に出会わせることも同様です。気持ちを想像することに困難のある児童には、気持ちを表すハートマークの数で考える等、様々なつまずき解消の工夫があげられていました。

このつまずき解消プロジェクトの事例集が、児童のつまずきを解消するための手掛かりとなり、教員の教育活動の力になればと思います。

# ★中学校社会科のつまずき解消における考察

【どのような考えで、加除修正をおこなったか】

各校の教員が、「生徒がつまずいているところ」「生徒のつまずきに対する手立て」を考え、実践したものをまとめました。「つまずき」は社会の学習が苦手な生徒だけのものではありません。生徒のもつ特性はそれぞれ異なり、私たちは、“全ての生徒にとって、理解しやすい・考えやすい授業になっているか”を常に確認・検証しながら、指導案を作成し、授業を進めていくことが重要だと考えています。

中学校の社会の学習は理解を進める上で、基本的な知識の習得・定着が欠かせません。特に歴史的分野では、人物名、できごとなどを覚えることが、内容を理解することにつながります。公民的分野でも、現代社会のしくみや状況、問題を理解していく上で、政治や経済に関する基本的な知識が必要です。また、資料（図、表、グラフ、史料）の内容や特色、変化を読み取り、分析し、考える力をつけていくことも必要です。高校での学習内容や入試内容も視野に入れて、授業を進めてもいます。

このように、生徒に様々な力をつけていく授業内容・展開が重要になっています。さらに、生徒が興味・関心をもち、自ら気づきや発見があり、考えを深めることができる授業を作っていきたいと思っています。【つまずき解消の手立てのポイント】

（授業）学習内容を指導案におこすときに、「生徒たちに何を理解させるか、その資料から何を読み取らせるか、どの点について考えさせるか」を考えて、作っていきます。そして、「生徒が理解できるか、資料を読み取れるか、そのことについて考えられるか」という視点で、生徒への授業内容の提示方法を一つ一つ考えていきます。発問や説明の仕方、板書の内容（ノート用、ワークシート用）や手順（絵図、色分けなど）も重要になってきます。“PC”や“みえるもん（書画カメラ）”を使用し、モニター画面で、画像やスライド（パワーポイント）、動画を見せるなど視覚的に提示することも有効的です。

知識の習得・定着には、授業や朝学習に復習を繰り返し盛り込むなど工夫します。思考力をつけるのには、「考える」「表現する」時間を授業に組み込みます。グループでの意見交換は考えるきっかけを作ったり、考えを深めたりするのに有効的です。

社会は、世の中のこと、生きてきた・生きている人たちに直接的に関わる教科で、次の時代を担う人たちを育てる重要な教科です。教える側にとっても、常に新しい情報を得て、そのことについて理解し考えることを必要とする、やりがいのある教科です。どういう授業を生徒と共に作っていくか…ワクワクします。そんな気持ちを大切に、生徒たちとの授業のために、授業1コマ1コマの教材研究、指導案作りをしていきましょう。

# ★中学校保健体育のつまずき解消における考察

今回の実践事例では、前回の事例集を中心に修正や追加を行い作成しました。  
以下の表が、今回の領域別事例です。全体のバランスが偏らないように作成しました。

## ①【領域別事例】

体づくり運動		4	球技	バレーボール	4
器械運動	マット	2		ソフトボール	2
	跳び箱	3		テニス	1
陸上競技	走り高跳び	1	柔道		4
	走り幅跳び	1	ダンス		3
	ハードル走	1	保健分野		2
水泳		4	全領域		2
球技	ハンドボール	3			

体育は、一つの単純な動作だけではなくいくつかの動作を複合して一つの運動を作り上げることがほとんどです。まずは、『困難の状態』を正しく把握することが大きなポイントになると考えます。例えば、跳び箱では『困難のポイント』が、踏切・手をつく位置・空中姿勢のどこにあるのかによって『配慮の意図』『手立て』の方向が変わります。

また、配慮を要する生徒の多くは、自分の状態を言語化することが難しいのも特徴です。しかし、全体の生徒の安全面を確保し指導しながら、個別の配慮に多くの時間をとることは難しいのが現状です。

そこで、新指導要領での「学びに向かう力」にポイントをおき『困難の状態』を他の生徒と共に見つけ出す→教員から具体的な手立ての提示→他の生徒からアドバイスをもらいながら実行→繰り返し練習する等、学び合いの良さを生かした形で授業を展開することで、

○どの段階の生徒にも課題と役割が与えられる

○教員が全体指導を行いながらサポートができると考えました。

球技やダンスなど個人競技ではない分野の運動では、特に技能だけでなくコミュニケーションの取り方につまづく生徒も少なくないと思います。

そこで、グループ学習を取り入れながら学びを深めることは、有効です。

器械運動などでも、例えば、跳ね起き飛びで、試技をする横から、生徒同士がはねのタイミングで声かけをするという対話的な学びも取り入れるなど、工夫することが良いと思います。

また、体育館のステージ上から、ステージ下へ前転して下りる練習から始め、徐々に斜め上へ跳ねる動作につなげていくなどスモールステップの考え方を活用する。ステージにマットやステージ下にエバーマットを引くことで恐怖心を減らすよう場の工夫をするなど、「配慮が必要な生徒への手立て」だけでなく、授業の中で、全体の生徒に対しても、具体的な配慮をどのように行うかということも大切なことです。

## ◎教科つまずき解消における実践事例（一部抜粋）

### 小学校社会

教科	学年	領域	①困難な状態	②配慮の意図	③授業の手立て	④実際の様子
社会	3年	市のうつりかわり	学習課題を見つけていることが苦手な場合	ヒントになり言葉を手掛かりに疑問や学習課題を発見しやすくするために	5W1Hに基づく疑問詞六つをテレビモニターに提示することで、気づいたことを疑問文で記述することができるようする。	「気づいたこと」を記述することはできるが、「疑問に思ったこと」を記述することが苦手な児童が、資料から自分の疑問を発見し、記述できるようになった。
社会	3年	市のうつりかわり	年表を作成する際、何年前や西暦で示した時それがいつ頃なのか理解しにくい場合	日野市の昔がいつ頃なのかをよりイメージしやすいようにするために	日野市の人口に注目し、「日野市ができたころ」「人口がふえたころ」「げんざい」という3時代に分け、更に色分けし、その当時の道具や日野市の様子を写真などから読み取っていく。	年表を作成するのが難しい児童でもその頃の様子をイメージしやすく、その時代時代の特徴について気付いたことを年表に記入することができた。

### 小学校算数（図形）

教科	学年	領域	①困難な状態	②配慮の意図	③授業の手立て	④実際の様子
算数	2年	「長方形と正方形」	頂点と辺がどこを指すのかわからない場合	頂点や辺を見つけやすくし、図形の構成をイメージしやすくするために	三角形であれば、三本の直線で三角形を作る。直線が交わる点を赤で、できた三角形の中の線を黄色で色分けする。	様々な三角形、四角形を描き、頂点と辺に色付けしていく中で、頂点と辺がどこを指すのかわかるようになった。
		「円と球」	円をかくときに半径が正しくとれず、コンパスを正しく使えない場合	正確にコンパスを使い、正しい大きさの円をかけるようにするために	実際にコンパスを使って円をかく前に、コンパスを指先でねじって回せるように何度も練習する。半径は定規の上でとらせるのではなく、紙に半径の線を引き、その上でとらせる。	両手を使って、コンパスを回そうとしていたが、片手で回せるようになり、不要な力も入らなくなって、正しく円がかけられるようになった。
		「長方形と正方形」	図形を構成する要素や、図形のもつ特性を理解できない場合	図形の内容や構成要素を理解するために	<ul style="list-style-type: none"> <li>色板や折り紙などの具体物を用いて構成要素や特徴について調べていく。</li> <li>図形の約束（定義）を教室掲示し、いつでも確認できる環境づくりをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>直角三角形の色板を合わせ意欲的に正方形や長方形、直角三角形を作りながら、その構成要素や定義を確認することができた。</li> <li>授業中に何度も図形の定義を確認しながら活動することができた。</li> </ul>

## 小学校 音楽

教科	学年	領域	①困難な状態	②配慮の意図	③授業の手立て	④実際の様子
音楽	1年	器楽 鍵盤 ハーモニカ	リコーダーの正しい指のおさえ方や運指が身に付いていない場合	リコーダーの指のおさえ方や運指をスモールステップで、音を聞き演奏できるようにする。	指が穴をふさげているか確認できるように、出したい音の指を上げたり下げたりする。次に息を入れ正しい音が鳴っているか確認する。できたら簡単な曲、息を入れずに運指を確認し、できるようにしたら息を入れるようにする。	指を上げたり下げたりすることで、音が鳴っているか耳で聴いて確かめる様子が見られた。実際に吹いた音でなくても、正しい指のおさえ方や運指を自然と身に付けられるようになった。
音楽	1年	鑑賞 リズムの特徴を聴きとる	繰り返しのリズムを聞き取ることが困難な場合	繰り返しリズムの特徴を理解して聴き取れるように。	特定のリズムを手拍子で確認してから鑑賞曲を聴き、同じリズムを見つけられるようにした。特定のリズムを見つけたら曲とともにリズムを打ち、教師も一緒に確認のためにリズム打ちをすることで自分も演奏に参加している感覚で鑑賞できるようにした。	繰り返しのリズムのため、1回目からできなくても、まわりと一緒に参加することができ、真似をしながら楽しく参加できるようになった。

## 小学校 学級経営

教科	学年	領域	①困難な状態	②配慮の意図	③授業の手立て	④実際の様子
学級経営		持ち物処理	配布プリントをしまう処理が困難な場合	配布されているプリントを確認しやすいように	配布するときに、色付きのもの・大きさの違うもの・写真は貼り付けてあるものを区別しておき、見た目が似たようなプリントは続けて配布しないようにする。	「次は、○色です。」「次は、少し大きめです。」のようにそのプリントの特徴を伝えることで、ぱっと見て、配布されてあるかどうか認識しやすくなった。
学級経営	1～6年	人間関係（相互理解）	互いの違いを認められない	楽しみながら互いの違いに気づくために	5種類程度の動物のうち、1日だけなるとしたらどの動物になるか考えるワークを行う。動物を選んだ理由と他の動物を選ばなかった理由を学級全体で共有し、同じ動物がもつ性	どんな人でも、よさがあることを理解し、他の生徒のプラス面に目が向くようになった。

					質がプラスと捉えるか、マイナスと捉えるか人によって違うことを体験する。	
学級経営		意見の表出	自分の考えがうまく表現できない	自分の考えを表現するのが難しい児童でも、自分の考えに近い方に意思表示をすることで、安心して表現できるように	○ 二つの考え方があったときに、「〇〇だと思う人は右手、△△の人は左手を、分からない人は両手を挙げよう、せーの」と全員が意思表示できるようにする。 ○ 数を問うときや、何番だと思うかなど、「1、2、3を指で教えて」と指で表すようにする。	手を挙げてことばで発表するのが難しい児童も、自分の考えを表現できている。ゲーム感覚で楽しく表現できている。

### 中学校 技術・家庭

教科	学年	領域	①困難な状態	②配慮の意図	③授業の手立て	④実際の様子
技術	2年	D 情報に関する技術プログラミング	「命令」の意味が分からないためにプログラミングが困難	「旋回」や「ツイスト」など、命令がどのように動くのかをイメージできるようにするために	一つ一つの「命令」の動きを示した動画を提示したり、タイヤを回転させるモータがどのように動くか簡単な模型で示したりした。	映像化することでそれぞれの「命令」の違いがイメージでき、プログラミングがスムーズに出来た。
技術	2年	C: エネルギー変換に関する技術 ○ 製作実習	電子部品のはんだづけの手順やコツをつかむことが困難な場合	はんだごての工程やタイミングのイメージをつかめるように	はんだごてをあてる・はんだをとかず、はなすタイミングやコツをわかりやすく図で示した大型の掲示物を使って説明した。その上で、不要な部品を使って練習し、本番の作業をさせた。	はんだづけの映像よりも、連続した大型の図の方がイメージをつかみやすかったようである。練習を1回、本番のはんだづけが1回ほどで、ほとんどの生徒がはんだづけをできるようになった。
家庭	1～3年	A 家族・家庭生活 (家族・家庭生活につ	生活に関わる課題を考えることができない	自分の生活を振り返り、課題を発見し、主体的な学習ができるように。	気づきを促すために、生活事象の写真やイラストを提示して、発言を促すなどフオトランゲージを行った。	写真などの資料を見ながら自分の日常を具体的に思い出すことができ、クラスメンバーとの対話をする中で課題を見つけることができた。

		いての 課題と 実践)				また、自分の得意なことに気づき、生活の改善に生かすことに意欲的になった。
家庭	1 ～ 3 年	A 家族・ 家庭生 活 ( 幼児 の生活 と家族) 幼児と のふれ あい体 験学習	幼児との ふれあい ができず、 孤立して いる。	幼児と自然 に関わりを もてるよう にするため に。	個人でなく集団対集団の体制を取り入れた。 例えば保育者の計画の中で、園児達と同じ製作物を作るなど、決まっている活動の中で、園児と関わりをもった。 なお、園側には事前に生徒に関する個別伝達をしておいた。	保育者がそばにすることで、安心して園児と関わっていた。事後の観察まとめでは、自分の心の動きを時系列に、順を追って書いていて、幼児に対する気持ちが変わっていたことを記録していた。

## 中学校 美術

教科	学年	領域	困難な状態	配慮の意図	手立て	実際の様子
美術	1 ～ 3	十二 色相 環の 作成	三色を使っ ての作業手 順が理解で きず見通し がもてない	正確な色を 作るために、 手順を示し、 場を構造化 して、混乱が 起きないよう に	混色の方法や手順を板書や ワークシートで示した。また、 試し塗り用紙を用意し、 見本と照らし合わせるよう にした。必要な三色の絵の具 のみ使用させた。他の色はし まわせた。	混色の方法を習得させる ことで、意欲的な活動 となった。机の上には必 要なものしか出さない ようにしたことで机が 煩雑になって混乱する ことがなかった。試し塗 り用紙を活用し、何度も 見本と照らし合すこと で目的の色をつく出す ことができた。
美術	1 ～ 3	木版 画	木版画の下 絵の手順を 理解できず、 下絵を適切 な大きさに 表現できな い	下絵を適切 な大きさに 活かせるよう に	版画の制作のながれと下絵 と版木への転写を実物大で 示した。適切な大きさになる ように拡大コピーを使い下 絵を完成させ、版木に転写で きるようにした。	見通しをもたせ、拡大し た下絵を版木に転写し てからはほかの生徒た ちと同じペースで作業 を進め、完成させること ができた。
美術	1 ～ 3	木彫	彫刻技法を 活かして彫 刻すること が困難	どのように 彫れば良い か具体的に イメージし、 彫りの技法	・教材提示装置で拡大して実 演した。 ・見本を用意し、自由に見る ことができるようにした。 ・試し彫り用の端材を用意	実演や見本、試し彫りの 支援で、ほとんどの生徒 が彫り方を理解し彫り 進めることができた。初 めは難しかった生徒も、



				を活用するために	し、希望する生徒には練習をさせた。特に困難な場合には、彫ってみせた。	他の生徒のやり方や見本を見ながら彫り進むうちにだんだん理解していくことができた。
--	--	--	--	----------	------------------------------------	------------------------------------------

### 中学校 英語（聞くこと）

教科	学年	領域	困難な状態	配慮の意図	手立て	実際の様子
英語	1年	GET Ready	文字と音が一致しないとき	発音することの困難を軽減するために	パターン化・視覚化 口の形を見せる。その後同じパターンの単語を並べて発音 ・違う単語で同じ発音が出てきたときに注目させる。・同じ発音の単語を集めて集中指導する。	他の単語で同じパターンのものが出た時に、以前出たのと同じだ！と反応した。
英語	2～3年	各レベル	音声で流れる教科書本文の内容を掴むのが難しい	ナチュラルスピードで話される英語の内容を理解するために	①新出単語を使いながらオーラルイントロダクションを行った。 ②一度本文を流した後、聞き取れた単語をマッピングして情報を整理した。	一度目では内容をつかむのが難しかった生徒も、マッピングされた情報を頼りに理解することが出来た。

### 中学校 特別支援（通級指導学級）

教科	学年	領域	困難な状態	配慮の意図	手立て	実際の様子
特別支援通級による指導	2年	コミュニケーション	コミュニケーションスキルが身に付いていないために、同年代の生徒と会話をする際の受け答えが困難	自然なタイミングで、あいづちを打ったり、自分の考えを言ったりするとよいか知り、行動する助けになるように	自分のパーソナリティに関わる短い質問が書かれたカードを引いて、すぐに自分の考えを言う人と、それを聞いてあいづちやコメント質問をする人に分かれて小集団のコミュニケーション活動を行った。	相手の話を受けて返事に困ったときに、どのようにあいづちを打てば自然に聞こえるか、質問はどうすればいいかなど、短い時間で繰り返し練習でき、生徒の自信につながった。

特別支援通級による指導	2年	心理的な安定	不安感が強く小集団の授業において、他の生徒と打ち解けるのが困難	初めての場面の不安感を軽減させ、共同作業を通して、互いに良好な関係を築くために	教員が介入し、事前に内容を説明したうえで、目的を明確にした共同作業を行わせることで	作業を通して互いの会話も増え、表情も明るくなった。その日以降も、他の生徒と会話する機会が増えた。
-------------	----	--------	---------------------------------	-----------------------------------------	-------------------------------------------	--------------------------------------------------

## 5. 今後の課題と対応

### ●今後の課題

小学校、中学校両方のつまずき解消のヒントとなる事例集をまとめ共有することとした計画は、ようやくまとまることはできた。今回は小学校中学校とも教科領域別の分類でまとめたが、事例集として日々活用するためには、仮説である「困難の状態別の分類」や「技法別の分類」など、更に使いやすい方法で分類できるとよい。また、日々の授業でつまずきを解消の視点をもち工夫ある授業の構築ができるよう積み重ねることを今後の課題としたい。

第三次日野市学校教育基本構想では、一人一人の学び方の違いに着目し、わくわくできる学び合いの環境デザインの構築に取り組んでいる。そこで、つまずき解消の視点を児童生徒と共有し、児童生徒が自らの学びやすい方法に目を向け、時には自ら要求ができるようにすることも課題である。

### ●将来における「手立て」の活用

今年度の「教科つまずき解消プロジェクト」でまとめられた「手立て」は、成果として児童生徒の将来にわたる自立のための指針に役立て、個別の教育支援計画である「かしのきシート」に反映し、指導の指針の一つにしていきたい。

## 6. 問合せ先

組織名：日野市教育委員会

担当部署：発達・教育支援センター